

いのち迄のび／＼にけり師の君や

月花に似し人のなさけに  
み情のあつきさ／＼身にしてみて

古里に歸るも日毎しのぶる

宿立ちてふり向く濱の松かげは

はや見えねどもいとど後引く

親しみし君ならなくに宿立てば

なごりの中に面かげの浮く

◆聖境の歌 渡邊 信 覺

古の聖の庵のこひしきは

秋に櫻のかへり咲くころ

御廟のみまへに伏せる老僧の

雪もはらはでかへりゆく見る

此の溪にかくれて住むか驚の

初音聞くなりやまびこのこえ

御舍利のみ堂のわきにはぼたん

うら／＼照る日につばみほころぶ

鐘に聞けと歌ひし人は何故に

春のみ山を去りしか惟へ

水を汲み薪折り取るすべなくば

わかき山がつさびしからまし

白糸の瀧にかゝりてみ佛を

祈れる優婆夷こゝろゆかしき

紅葉狩君ゆきまさば山わけて

六老畑に道あないせな

繪筆にはえがきえがきてえがかれじ

鷹取の雨西谷の霧

登らなむいざもろともに山坂を

思親のみ堂高きにあれど

黒崎達也

書にあきて又友よりの便り讀み

思ひにはすむ秋のたそがれ

